

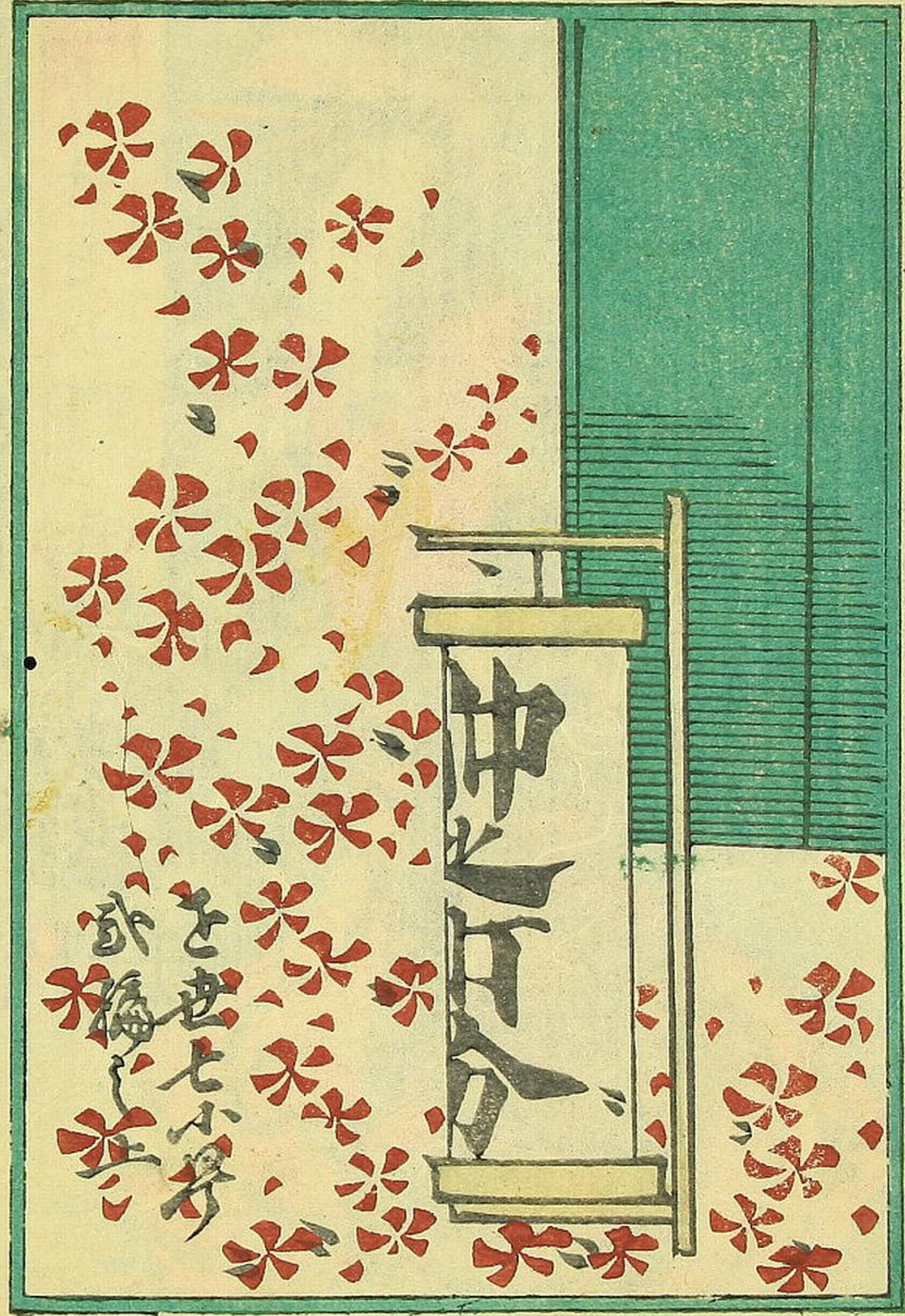


25

20

15

10

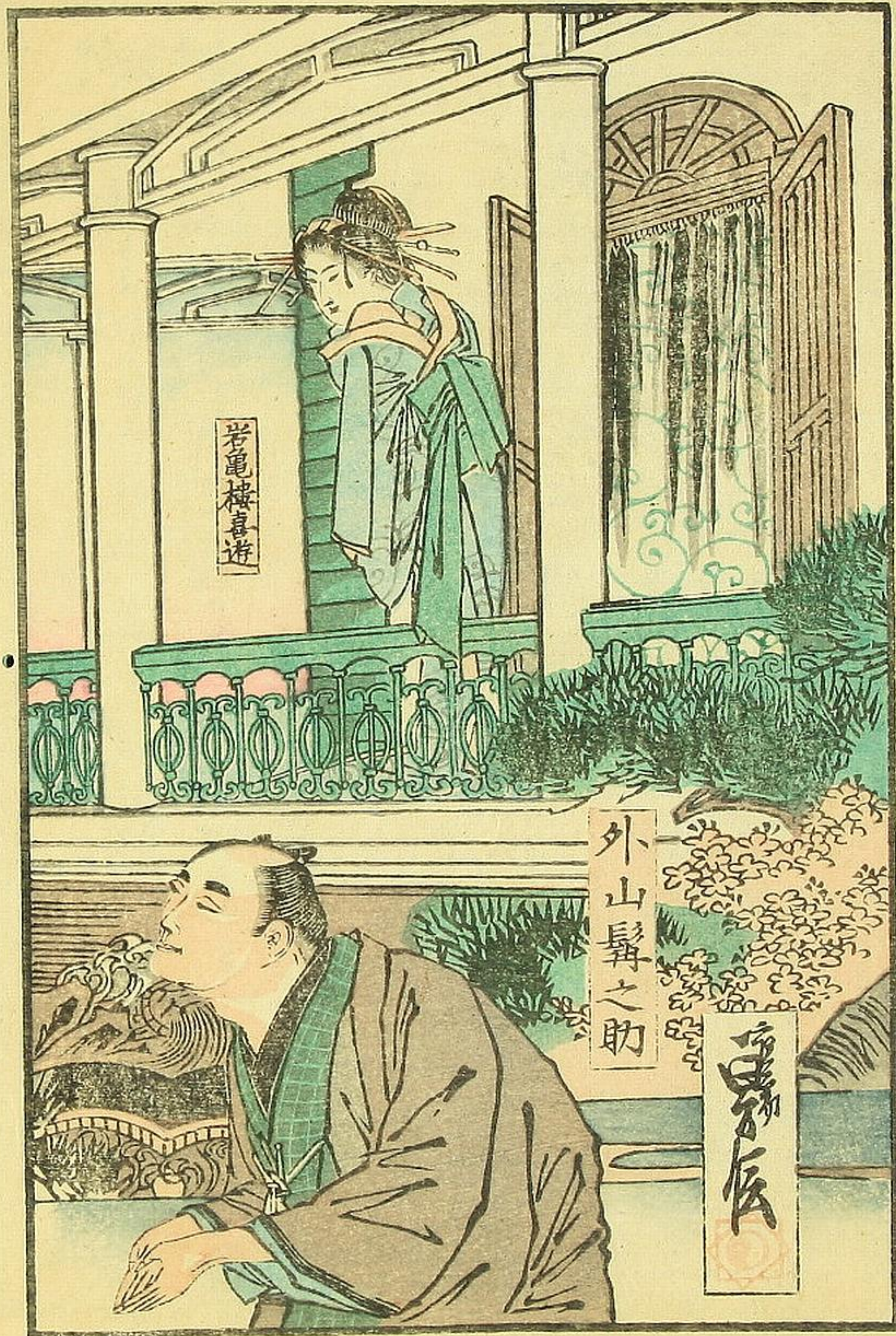


<48-2283>

洋語僅々20年六音の手簿を控地球面の大商法一步を
 進々金貨を得るは幸福もあやわやせさうとは又我日本の
 三十一文字は雨を降らせり哥道の徳も小野女が古事
 を喜遊が倭寇の狂句と化し架空より混合たる秋雨
 ちぐくも七婦女が傳記を全七卷の書賈が需は應し秋
 夜の徒然草ともちりんと試首を

明治十三年十一月

玄々舎五湖



近世七小町貳編上の巻

○阿松の両國青柳より忠藏と連歸り酒肴の仕度も調へて
 むと一めやかに饗應けれを忠藏の有項天敷々廻る盃に酔
 も臙の廊近く五更の鐘も告渡れば徒屏風を引廻し怪しき
 夢の仇結び後の憂ども知らぬお松とすせし酒にスヤク
 と寐入の眞の夜中頃表の織りも勝手知つたる我家の雨扉
 足で蹴かへし椽先お足ふみかけておどり入たる大坂吉は
 出亦危丁と口も囁へ突然屏風を取退てうぬ密夫め四ツに
 する覺期しると忠藏お松が袴髪掴み既に刺んとす折る
 ら後の荒塗の崩れより思ひがけあき母お千代が始終と聞
 て吉に向ひ道理を迫て和しお松が唯忙然と忠藏は夢も夢見
 し心地にく齒の根もあはず片隅に龜り居てお千代も此場



の扱ひを頼むと計り外に言葉も内證の親子二人の水入を
心得顔みて大坂吉を小影に招き論をも虚か實情の人の命
の山吹色手切の金と轉びに千代と出もせぬ涙を深べ
まことらしくも言入て忠藏も百圓の金を出して命乞ひの
安ひものだど胸ぐらに退引させぬ板ひさし月さし登る主
個より預かりし金あがら命に換がたしと正直一圖の忠
藏あればお千代が言葉を眞受ケ金百圓を手渡して虎の
尾を踏毒蛇の口を退れし心地にて裏田甫を抜出て欠出す
折しも秋雨に身は濡しばひ羽抜鳥ぬぐらと放れて逃行々
る○跡に三人あたりと見廻し去すまし顔吉さん首尾は上
出来とお松がいへば大坂吉も庖丁其處へ投出し元から仕
組ぶ物ざんまいそんでのどに血を見ねむるぬ處へ後

ろからとめてくれたわ思や壺命がわりの二分判で耳を揃
た此百圓味くゆめたじやねへりとの字も傍からお千代は
得、笑一斯ゆふ時こそ一廉の役に仕て腕を見や字と思ッ
て日おろ親の慈悲首尾よくいゆ百圓の入谷田甫の二ツ分ケ
りの親の慈悲首尾よくいゆ百圓の入谷田甫の二ツ分ケ
モウ観音の明七ツ大層寒さを吹さらす風を凌ぐわ茶碗の
酒と三人廻る逆もどし順にの行ぬ身のせき悪はやくも廳
に達せしかお松吉藏討手の捕亡手よく得物携へて裏表よ
りおどり入上意の聲に三人は南無三捕方あるかど大坂吉
は有合う徳利を字ち附て逃んど欠出を捕亡は突棒さす
又六尺棒吉を目かけて打か、り夫曲もの退をなといふ間
もあらせす忽ち吉は利腕打をへられその儘其處よひれ

伏をばそれとゆふ間に折おるさあり用意よういの早はや繩あひぐるくまさ其その
間まにお松まつの辛あつ字じして田た甫ふの方かたへ逃にげ延ひる娘むすめが跡あとを母ははお千代
退のりれ出いんと身みをもぶへども老おきなの足あし氣きをあせる程ほど足あし叶あはず
忽たちまちその場ばに捕は縛ばされ大坂吉おおさかきちとお千代ちよの二ふた人たりは市政裁判しせいさいはん
所しよへと護ご送そうにありお松まつの天網てんままぬがれく暗夜あんやも乗じ身みを
やゆし何國いこくともあく逃にげケ去さりぬ
○却ひて爰こゝに説と出いすの誓ちかひの洩あぬ淺草あさくさの觀世音くわんせきんには近ちかき
彼かの並なら木町きぢょうの松屋まつやの手て代た忠藏ちゆうざうの主しゆ個この手てより受取うけとりし二百圓
を橋町はしぢょうの何某なにがしへ仕切しきりの金かねを懐中くわいぢゆうある一沙いっさ入現いりげんの羽生はぶの小屋こや
に忍しのびゆきかねてお松まつの言葉ことばをかまへ色いろもよろゑてこゝ
ろをとふかせば思案しあんの外ほかに忠藏ちゆうざうのその夜よお松まつと立たまわす
廷屏風ていびんぷうも枕まくらをなふべ怪あやしき夢むを破やぶりたる大坂吉おおさかきちが密夫みつぶあ

りとおどり入いる身みの災害わざはひ主家しゆかの金かねの百圓ひゃくえんを手切てきりもとて
奪うばわれしがかゝるゆふせきあばら家やも一夜いっやを明あすも面おもてぶ
せましてや主有しゆある身みとも知しらぬつまを重おもねし身みのあやま
りに前後ぜんごのことも思おもひこそお千代ちよの言葉ことばのいふまよく
百圓ひゃくえんを渡わたしやり辛あつくも其場そのばの退のりれても二百圓にひゃくえんのその内うちが
中央ちゆうお不足ふそくせしとさればそおく主家しゆかへ戻もどられず知るべの人ひと
ふ話はなさんと思おもへど是これさへはづかしく兎うさぎやせん角かくやと思おもふ
内うち十日程じつにちの日數ひかずと經へたればお母ははく敷居しきいも高たかくあり切迫きつぱくに
つまる身みの落度らくど死いんで言譯いひわけするより外ほかの思案しあんのあひと正ただ
直ただ一圖いちずにとり詰つめて歩行あひむともなく古郷こきやうの方かた西にしへくと足あしの
向涙むくみよしめる袖そでヶ浦品川驛うらしんがわきもはや過すぎて主個しゆじんの恩おんも大井おおいが
原身はらみの自露しらしゆの無分別むぶんべつ置所きじよな兒罪科こゝろざいのいもさ鹿島かしまの社やしろを

伏拜ふしのち懐中くわいちゆうより書置かき一通取出いっとうして犯せまか罪つみの次第しだいを
認めした残りのこし金圓かねをろの儘まに添そへてお詫わの後の世よでお家の繁はん
昌草葉じやうくわいの影かげより祈いのりまするとふ一拜いっぱいみッ、彼の財布さいふに書か
置を入れ傍かたへの枝えだに結びむすびさげ帯おび解ときやどき榎えのきの枝えだも引ひうけ
て覺期かくを極きめ稱名しょうめいを口くちに唱なへて眼まなこを閉と帯おびに手てをかけ忠藏ちゆうざう
の既きに縊くれて死しんとするその手てを確しつり抱いだき留とマアく待またッ
しやりませとゆふ聲こゑに忠藏ちゆうざうのふり返かへりて所詮しよせん死しかねばあ
らぬ身みの上うへ留とまよ殺ころして下くだされと振り拂はらふ手てを玄くろけか
擱お置きイヤ殺ころさぬ是これが通とりう、りの者ものあれば見退みがして
置をうが顔かほを知しつたる忠藏ちゆうざうどのめりたに殺ころしやアいたさぬ
と抱いだき留とまれ忠藏ちゆうざうの月つきのありり見合みあす顔かほ「ヤアこゑさ
わんつかの直あしやどのア、面目めんぼくかい死しあねをあらぬわた

しの骸かたどうぞみ殺ころして下くだされと身みもぶへあすを安次郎あんじらう力ちから
まりせに引ひとめて「サア死しのふとまでのお覺期かくはさら〜
無理むりじやおおざいません斯うらお身みの上うへにあしたる罪つみとみ
あアノお松まつめが悪事あくじのなん〜と聞きく忠藏ちゆうざうのふ〜んにお
もひひ、そんなら直あしやどのよもお松まつが事ことを存ぞん存ぞんにてハ
イ知しらなぬであるう何なにと隠かくそアノお松まつめハ此この安次郎あんじらう
が實じつの妹いもうと「サエ、とおどろく忠藏ちゆうざうより安次郎あんじらうの傍かたりを見みあ
が小こ聲こゑあて「サ、そのおどろきハ尤なほどがいつか兩國にこくの
青柳あおやなぎにてああたに斗はらせお目めにか、つたその時ときにゆゆを
此事このことを打明うちあけて斯うら〜とお話はしすそふどの思おもつたなれど
折角せつかく大坂おおさかから尋たづねておざつた傳次郎でんじらう兄弟衆きやうていしゆうのまゑを憚はりッ
イ余よ所言ごんごんも異見いけんしたのも實身じつみに余よるわたしがせゆあま

それ又また此頃噂サを聞ば妹のお松めや大坂吉の悪工み
で百圓といふ大まの金ととられあそめたと聞てよりす
ぐに並木のお店へ尋に行ば二三日前よりお店へ進の返り
がないと聞てより夫でいよいよ金の切迫も身の置所よ
困り果テ上方へお越しあそめた事と思ひの外斗らあ爰で
お目にかゝりしもつけの幸ひ○モシ忠藏さん金に結るん
若ひ時の有りうちぶ必らあ短氣を出しちやアゆけません
と命をゆあぐ安次郎が言葉も空よ松吹風耳にもとめぬ忠
藏ハイヤ〜それの死せる此身と留て下さる言葉の常死
あねばあらぬ此忠藏は深切のかぞ〜はゆづれあの世で
お禮をすまそるとまた立ち、る死支度安次郎は猶引とい
めて(コ)ンサさうしたもものぶ今もゆふ通りぶろの百圓の金

さへ調達ておまへさんの主個へ届けさへそりや死するよ
ハ及ぶぬこと叶ぬ時ハ神の庭爰逢ひしも結び縁の
お松が説言幸ひ是より程近きとたしが羽生の小家にて何
ろのお話しをいたし升うられでは人目がとまたもや案ず
る忠藏が必汲だる安次郎ハ介抱任ながらサそこが町と違
ッて非人の住居便る者としてござりませぬ悪くは斗らぬま
せん兎も角もわいと一所よれ越しなさいませと身の置所
あは忠藏をいたわりあがら安次郎鹿島の宮を跡にち一畝
道ゆたひ高輪なる東海禪寺の境内の己が小家にぞ伴ひけ
り○抑説分る外山髯之助ハ横濱ある亞人伊留宇須が商館
よ立歸りて六郷川にて正庵横死の件をゆふさに語りたれ
ば翌日伊留宇須ハ外山を連れて岩龜樓に登り深くも正庵

横死の事を隠み樓の主個を座敷に招き喜遊が事を追れど
も主個も即時の答舌なく只期を延すあいさひなれば伊留
宇須も今立腹なして喜遊得心無死を主個はじめ賄ひ番
頭等が奸策にて我れに金圓を費さんと今日迄も釣延され
し遺憾にと是までの取替金即時に戻すべし今より此樓に
用事ありし早受取歸らんと外山を以ての手詰の催促よお
雀をさだめ若ひ者長吉等も其席に出來りて兎や角と期を
延させ藝妓等にもめてはやさせ喜遊を必らせ後刻方まで
に得心させんとお雀が確かに受合ば亞人大によるこびて
座敷陝しと酒宴に興しいたりる○主個の客の座敷を下
り喜遊が部屋に直ちに到りて間をわめる氣も歎息あして
言出そよコレれいらんぬつやよりお雀や長吉と以って

そあへ勧めた亞墨利加の客人尤吉原より住替のその時
にの盟ひし言葉の覺へていれど其處がどうも商賣がらも
へ夷人の方へはそふもぬれを病氣とふて今日の今ま
で日を延し一寸事なら客の方にも退屈して他の娼妓を揚も
やせんと一寸道に言ひ做す程に猶そあたの事のそを戀
慕ひほろへ見返る心なく右左するうち我樓にて數百圓
散財せしに今にたりて一回も喜遊も遇せぬを怒り全
外國人と侮どりて金貨を掠る奸策あれば今宵喜遊を座敷
に出し我心を慰めあばなと此上にも金圓を得させん倘
た異義に及ぶ時の違約の廉を糺さん杯とそれの厳
死かけ合ひそも今宵も逼れども今となりては言解くと
もあくつゝまる所はそなたの不幸固く約した譯のあれど

實父正庵どのまでと得心の事あれば此中も客人の手代外
山髯之助どのが態江戸まで迎ひ一行やつたあれど折あ
しく正庵殿の持病とやらよて是悲なく主といふ本の名ま
への權をもちひ附るよのあらねどもそきたの約束守る
時は渠に違約を糺さる道理もしやアノ客人怒りに觸る、
その時の我此廓の立行がたしコレおいらん異人と言ふと
も禽獸ならせ同じ天地に生を得し人間にて有るものをよ
しやその身を任せたとて左ほど耻ども成るまい今此横濱
に有る婦人は娼妓は原より素人でもみな嬖妾とか言名を
付て身を任すものもあれば名をとるよりも徳の世の中利
を得るほふ能ふかと思ふゆへうなたもいけもの偏固
を乗てどふかアノ夷人を容み取つては呉れまいかと或の

賺しつ駭かしつ辭を盡して説論せば喜遊はまばらく回答
もなく黙然として居たりしが何思ひけんうち領元夷人の
客よは出まじとかたく約せし事ながらお郵の立行がさし
どあるものをそれを否ともいわれねばモシ旦那さんにか
にもあなただの言葉よまたがひその夷人さんを今宵から客
人にとりまると直なる喜遊が挨拶に主個も大に喜びて
さあがら喜遊を拜まぬばあり後のうれいとなる事の知ら
ぬは常の佛法氣も鬼となつたる身の切迫主個は一禮演ッ
、も部屋と立出足を宙よ彼伊留宇須が酒宴の席よ來りて
喜遊はやうく得心あして只今此座敷に出來ると主個が
告げに喜ぶ亞人より外山は心に思ふやう喜遊が得心あす
上は黄金の蔓よとり付たりと笑壺よ入ッる伊留宇須を

賣 捌 所

大阪堂	心支橋丸町角	淀屋橋平野町角	平野町御聖前	天満天神鳥居前	南支橋堂寺町	心支橋三寺筋北	南地十日	心支橋同防町	日本橋南詰東	南支橋三寺筋北	日本町心支橋東
北尾	石川	松本	野中	田口	福士	森	中	梅村	梅村	梅村	岡
雲開	新和	平兵	清兵	安治	文忠	文忠	鳥忠	安兵	安兵	安兵	鳥
店	店	店	店	店	店	店	店	店	店	店	店

明治十三年六月百御届
 同 年 月 日 出 版
 發 兌 東 京 堂
 編 輯 者 大 橋 富 三 郎
 大 橋 富 三 郎 印

ねぶて上ヶさる天井板の大愉快と許多の歌妓等も演曲の
 手を尽させしそのうへに「メキシコ」(亞墨利加國の地名)銀
 貨と時散らし時移るまで猶も酒宴に乗じれどり狂ふてい
 たりける。斯て喜遊のその身の覺期を極めツ、己が部屋
 に仕ふたる新造禿口み用事と托し他に出させて跡も残り
 し只壹人あたりの障子立テまわし硯引よせ書置の文何
 かは白紙へ洋夷を惡とし仮名章の一通認めれわりて心
 づかに死出のはれ着も着替ツ、傍への簞笥の小引出しよ
 り短刀取り出し座を玄めたる死に支度床に飾りし香爐よ
 梅が香薫る庭ささは車軸の如く秋雨の降りさきりたる夜
 半の鐘愁ひをやらを喜遊が最期倭魂のほどこそ類ひな
 き哀れ悲しむ終りなり

(上の巻畢)





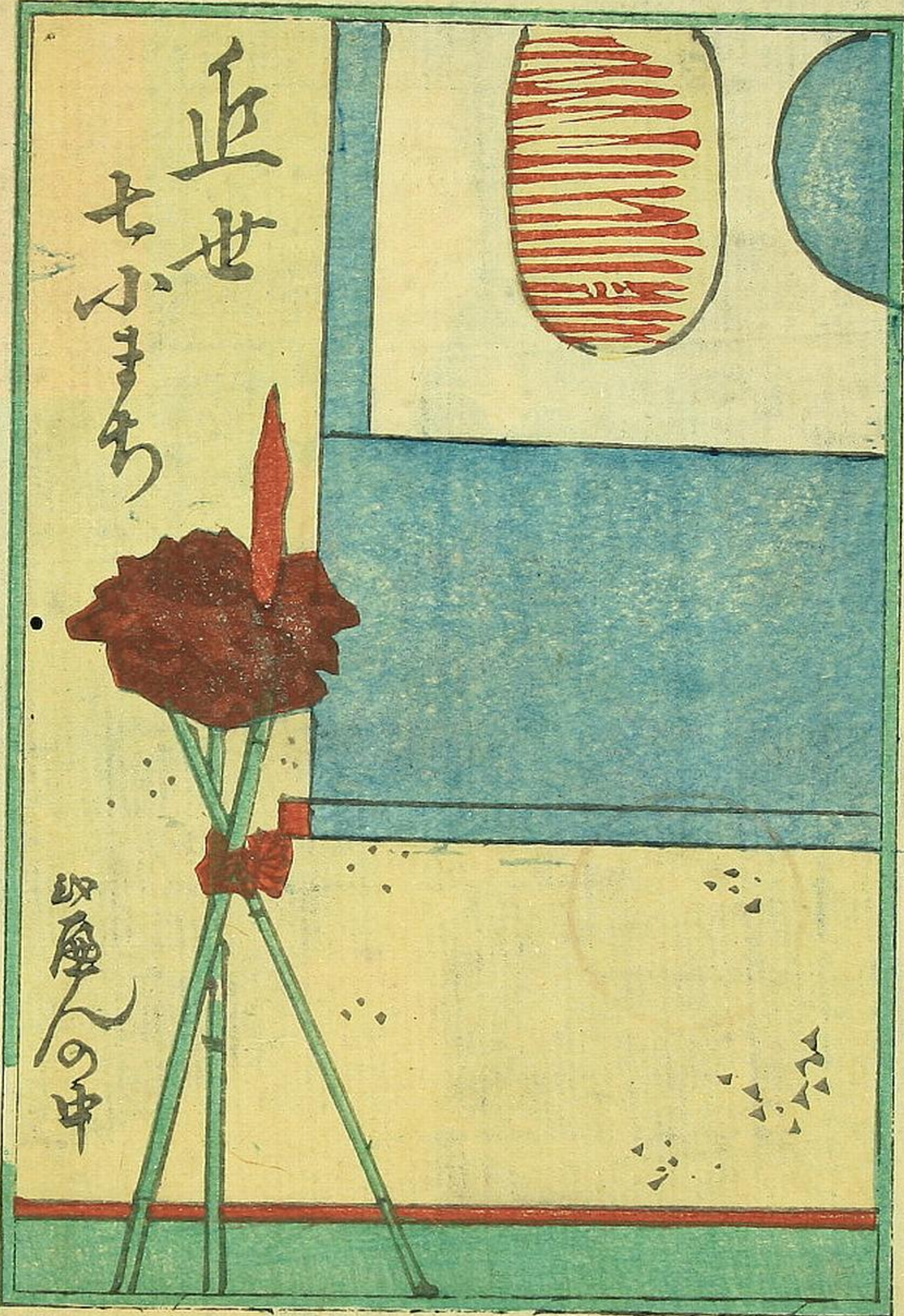
10

15

20

25

4509
5



近世
七小町

以庵の中

<48-8284>

近世七小町貳編中の卷
 ○秋雨の降り頻たる引ケ過ぎ時弾く三味線も宇ちこもる
 濕りがちある酒宴の興もおのすからもの淋しくも伊留宇
 須の喜遊が其座に出ざるを屢々催がそに化粧中と言ひ
 るしてまばらく猶豫を乞ひけるが餘りおそきにいふかり
 て主個はまたもや喜遊が部屋に到りてやうそ窺ふよ一間
 に屏風を立籠めツ、ゆと寂寥しき躰あるゆへ聲をかけれ
 ば回答もなく心得がさく思ふに予まづか屏風と押ひら
 けは無慙や喜遊の短剣にて自ら咽を刺串き朱も染みツ、
 倒れ居たる傍らよ一通の書を遺しあれば主個は大ひに打
 驚きて件の遺書を披覽見るに其文言く○(状の文にある)
 世に苦界に浮沈みそるもの幾千万人と限りもいそせ

近世七小町二編中

二

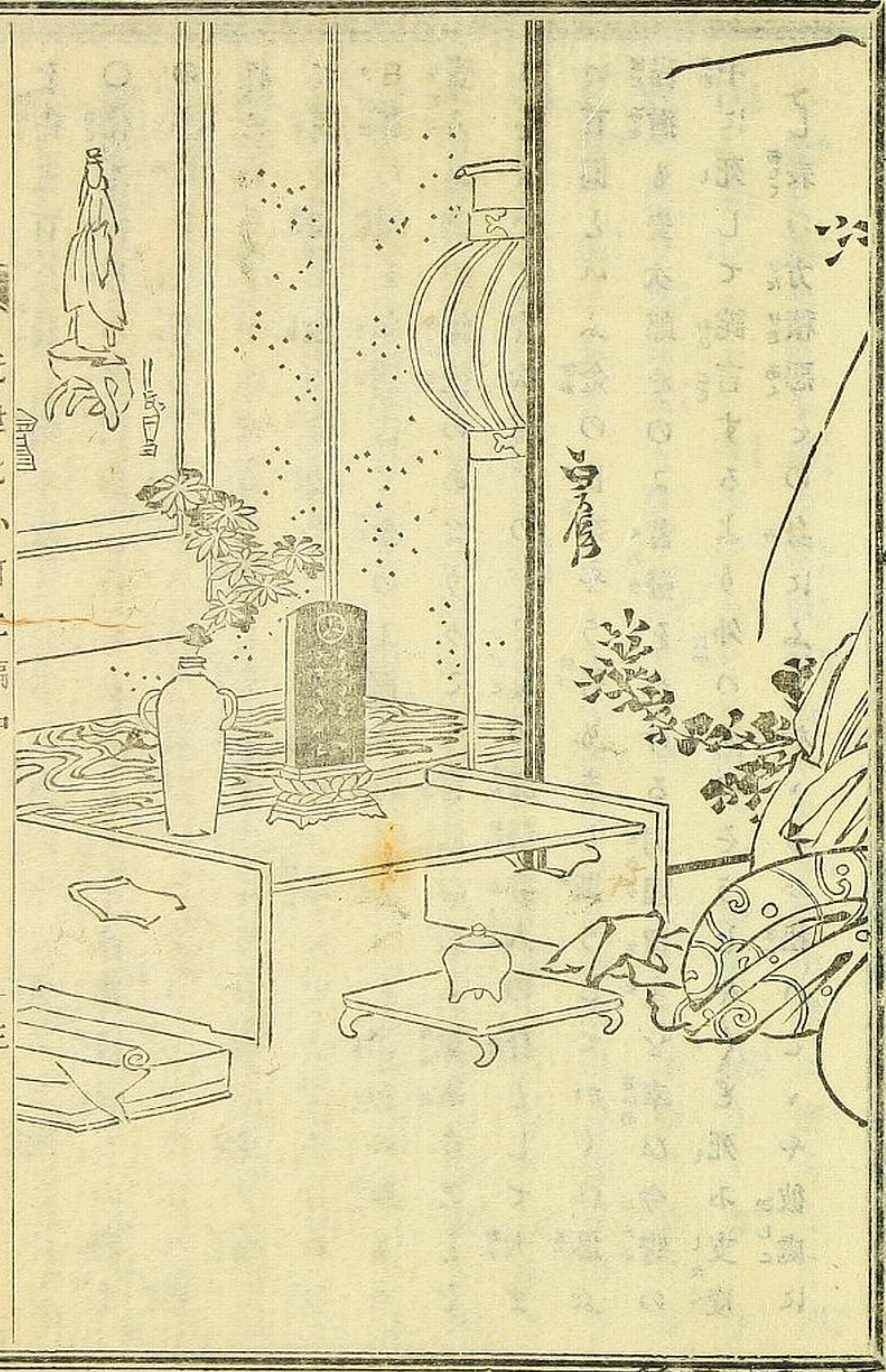
我が身も勤するからひとて父母の許し給はぬ仇人よ
肌もるすさへ口惜しけれど唯々主人の恩を顧
ふたりにと身の薄命とあきらめ侍べりしが其もとの
はかるた黄金てふもの、有るが故あらめ此金以まは
遊女の身を切る刃にいま、その刃の苦界を離れ彌陀
の利剣に歸しまいらせたく主人に辭して亡死双親に
仕へまいらせしへば黄金の光りをも何よかせんおそ
ろしと思ふ欲の夢さめよかしと誠の道をいそぎいま
無念の齒がを露はせし我が死骸を今宵の客にお
見せ下され斯るにやしき浮き女さへ日の本の記の恠
くすと知らしめ給はるべくい

まづのあらく目出度と

ト書終りたるその時の辭世に
霜をぶもいどふ倭の女郎花

と讀下しッ、主個も今の當惑し或の泣き悔後をなせども
詮そべあく再び亞人が座敷に來りて右の始末をもの語れ
ばみなく大ひにおどろけども誰あつて足を進ますものも
なく亞人は早くも其場の賄ひ百圓金を出して外山に種々
を托しをき商館に立歸れば外山の跡又一思案喜遊自殺の
せし上の伊留宇須再び此樓に來る事あしすれば今宵の
算用いたすは本の無益のこともとより貸金の有る事あれ
ばよもや否はすまじと心太くも外山にその百圓を懐中し
岩龜を出る東雲又朝まぶけより伊留宇須が取引先の諸店

近世七小町二編中



を街五百余圓を集め取り亞人の商館を横道も脱しける
○儲も松屋の手代忠藏の安次郎も伴とれ東海禪寺の羽生
の小家を住居よて非人の業を見習ひて十日余りの日を送
れどおくりかねたる主個の大恩安次郎も忠藏が憂を察し
て兎や角と金の才覺あすとも晝の仕事にいとまあければ
日暮の鐘を相圖にて金の工面も町の方へと出行ぬ跡よ
壹人忠藏が悔後のあまりうち言此忠藏も短氣あことを
さそまいと安次郎どのが日毎の深節非人の身として大ま
の百圓といふ金の出来やう咎もあし斯うしてかくれ忍ぶ
程猶も安次郎どの又苦勞をかける同理留主と幸ひ今宵の
中に死して詫言するより外のあゆそらじやくと死お支度
し表の方積悪その身にふりかゝるお松のこゝや彼處に

て身を隠せども鷹の探偵厳しきに兄が小家に便らんと門
口よ來かゝりて内のやふを伺へ忠藏の残り金と主
個へ詫の書置共に取り出せば外よの發せる悪心の是身
を退く足にあさんともくさんの内には覺期の忠藏は勝手
口より出刃とり出し自殺あさんとぞる所へお松の欠入り
ろの手をすがりモシ忠藏さん待て下さんせ本に短氣あ死
ふとまでのお覺期さらく無理でいござんせぬ斯したお身
よし罪のみんあいた一の一身にふりかゝりたる賤し
此身にお情うけしとよなき果報忘れおねてお跡を慕ひ
歩行あらぬ道もせも今日で十日爰彼處とねぐらに迷ふ
旅鳥折よくこよひ出逢ひしは淺草寺の觀音さまの五利益
ならんおまへに一度逢ふ上で身の決白を話した上は今

此世にほもひ出なし死ぬならどもく手を取てせめて未來
の一蓮托生といつて爰はわたしの兄さんの小家なれば爰
を落延び鈴々森の海邊より身を投て情死あして二人とも
品川沖の藻屑となりたゆわたし心と一時退れの迹仕度
胸に刃の含とも涙交りにかき口説心の底意汲かねて聞く
忠藏も初めの程の誠とも思ひざりしが詞のつやある毒婦
が口先色を含みし眞實に元よりお松に迷ひし忠藏ぞつと
身に染小夜あらし襟元より吹込で身も冷々と死神の骸を
放れて飛び去りしる今は死ぬのも打忘れへそなたの心は
夫程とは夢よも知らねば今までも恨んで居たは我あやま
りその日に跡を慕ひ出て今また爰で出逢ふとゆふも尽せ
ぬ縁にしであるあらん殊も手とり品川沖へ身を投げて

死ぬると迄女子の操正しき天晴見上し其方の心体忘れ
の置ぬ忝じけあゆと忠藏を落す涙の一車傍も見てとるお
松は猶詞をかまへて傍より添ひ仮りの契りを結びしよ
り實の本夫と思ひしゆゑ親をも捨てお跡を慕ひ爰で折よ
く出逢ひしおその甲斐もあくおたがひも生て添れぬ因果
同士凡そ死ぬのを恐れねば此上どんち愛目に逢ふとも強
と思ふものあし死んで花が咲ものかど小唄の文句によ
くいへば暫らく捨る命を存生譬へ一月二月ありとおもふ
たお方と世帯を持添ひ遠た字へ死ぬともおろひとるぞ
ござんそまといへば忠藏打點頭き我もさこそと思ふな
り元ある身にあり果たも其方が色に迷ひしゆる今また
爰で出逢ひしに尽せぬ神の引合せ死ぬるを止まり此儘よ

一旦古郷の難波津へ密に行ば負債の金も再び主僮へ返済
の手ぶてもあらん死ぬると心はやりし我ながらおろか
の到り残りし金にて片時もはやくと又もや安次郎へ詫状
一通遣し置旅の具調へ死ぬるに堪る門出とお松の裾をは
しおりにてかみくしくも身仕度し夜の明ぬ間と打連れだち
東海禪寺の兄が小家をぞ立法りて思ふ同士の女夫連れ東
海道をこゝろざし寺中をぬれ鈴ヶ森にさしか、ればその
夜の三十日の丑満頃人面さへもたましくみ洲にかゝり漁
舟の篝火かきかゝ見ゆるの之岸打浪の音さへものぞお
くも聞ゆれば前へ一歩も進み兼ねたるかさへにてアノ助て
と女の泣聲二人は聞付け何事やらんと伺ふ内安次郎は忠
藏を主僮の方へ再勤させんと金の工面に川崎なる仲間の

方へ談合も行ども出来ぬ金策も力失ふ戻り道アノ盗人よ
追剝と乙女がさけび一聲明付け元より誠氣の安次郎助け
やらんと泣聲知るべし探り寄つたるその折しも又もや來
り、る外山髯之助は横濱なる亞人の商館脱し心を急ぐ夜
の道此もの音を聞付けて立寄る所悪者木曾の熊九郎は南
無三邪尸がはぬりしどおどりか、つてお金が懐中へ手と
さし入れ仕事爲んど引出し胴巻お金の猶も泣さけぶにみ
あく一同又寄り添ば此もの音をはじめより傍へ又聞たる
お松の暗夜をさむわいよ忠藏が懐中せし百圓金を掠とり
爰より壹人逃去らんとお松は奸策を廻らしてわざと追剝
かゝり一體にもてあして暗に紛らし忠藏が懐中に手をさ
し入れて引出し財布忠藏おどろきアノどろばふと聲をか

けるに安次郎探ぐり寄つてお松忠藏財布をうせに争ふ中へ分つてはゆりしその手先き思ひを握りし金財布量目りさしかよ百圓餘り天のあたへと二人が争ふ中を引取り跡くらまして安次郎高輪さして逃去るうち外山壽之助は木曾の熊九郎を突き放しお金が手をとりに是も同じくその場と退れ東京の方へぞ行過る跡も残りし熊九郎をはじめ忠藏お松の百圓の金をとられし悔しさの跡を追わんと行きかけるを邪広あやつめと熊九郎はその儘忠藏を前なる深まへ蹴込し音もお松は又もや行かゝるを熊九郎はお松をお金と取り違へ手を取らうがらいつさんに川崎さして逃げさしける○斯て外山壽之助はお金が手をとりにやうくに高輪まで退れ來れどまぶ東雲の事あれば出茶やも未だ店を

張されを明きたる床机も腰打掛をばお金のそれに手を仕へ本に先死程の悪者の爲に懷中ものを取られし所あかゝのおかげで怪我もあく無事にお助け下さきて本もお嬉しき存まするとお金がある外山程よくも何んのその禮も及ばねど袖ふり合ふも他生の縁とやらか字見受し所が此東京の女とも



見へねへがおまへの生國の何國ぞと尋ねにか金面てを
上げ(妾)が生國の佐士の國にて鑛山某が小女なれどこの東
京の神田とやらに知己有つて本國より和舟の便よつ、の
ふ此永代橋とやらは所へ着岸あして神田の何國へ參
るぞと尋もどめしその所を先程の悪者が尋る方へ連れて
ゐてやる字とあまた詞に去たがひて昨夜中爰や彼處と連
まわされとうぐ仕まいふアノやふなこわいめに合ひま
ておざりますると話すを外山の開とりてム、ろれでい懐
中物ばかりじやないねまへのからぶまでまき上げてい
仕事を仕や字といふのぶそいつのあぶない所であつた此
東京とい字所のせいふんアノやふる野郎が多ひから氣を
付るがひひんそうして神田邊の知己とい字の何とひ字内

だ商人の士分の人かといとねんごろあるあいさつ(ハイ
その知己とすまするの紙商法を開くひてたりまそ大倉金
藏といふ内へまいりますのでござりますると小女が話せ
し大倉と名前を聞いて髯之助は猶々ひざを進ましてム、そ
れでは豪商と聞へのある紙問屋の大倉金藏方へろればあ
によりと外山は是を手蔓にあし大倉方へ入込て一商法と
開かんと意の奸策知らぬお金をひさわりツ、神田をさし
てどゆをた行その日も同じ刻限に安次郎は天より與へし
金財布と懐中あ一ツ、足を宙に運ばせて東海禪寺の己が
小家に立歸りてとひ死のく忠藏を呼び立てどもさら
出來るけしきもあければふしんの余り又見まわす傍へに
残せし忠藏が書置目早く見出して一通取り上げ開見れ

バ忠藏は百圓金を償ふて主個へ歸參のその爲に一まつ古郷の浪花の方へ足を向けしどの草々を讀終りて安次郎は當惑なし(エ、その主個へ無事と再勤させんが爲けふの今此安次郎が心尽しも水の泡と鈴ヶ森よて奪ひし財布を懐中より取り出して何國の誰の金かは知らねとも暗がりまざれどが手に入ったも忠藏どのを助けよと天よりお與へ下されしと嬉しさ余りに宙を飛で歸つて見ればその忠藏は此安次郎に苦勞をかけまゝと書置残して古郷の浪花へ歸りし上は無益の金を奪ひしが凡世界も金のゆらぬ人はなし此儘すぐに番所へ名のり出てとられし主へ戻してくれんがもしや財布の中も持主の所書でもあいことやらんとウチウへして改め見れを百圓金と忠藏が身の誤りを

主個へ委記せし書置に又もや安次郎の打たどる(忠藏どのをたそけん)と道ならぬと知りあがら取り得し金の持主は忠藏どの有つたるか一旦小家に書置まで残し置て出たれば金と夕邊とられし述よもや小家に戻ろまじ是よりすぐ鈴ヶ森へはせ行てどのやウチを探つてみると心そいろに引返し鈴ヶ森なる刑罪場の邊りそばそこや彼所と忠藏が身の行先たも雲を當途のたづねもの手蔓なけれバ安次郎力をぬかし尻居に土手の朝露を口にしめらし溜いきつた(二百圓のその内て百圓なくした身の言譯も主個へ死して詫せん心定めし忠藏どのその金さへ償ひんと心尽しの百圓も暗夜に出合ひし互ひの因果にて忠藏どのが持參せし此百圓を往來の者と心得て小家へ戻つて財布

010190517450

賣 捌 所

大坂堂
 心丸橋 元町 角 鴨
 定屋橋 平野町 角
 平野町 御靈 前
 天満天神鳥居 前
 南本町 三橋 北
 心丸橋 三橋 北
 南地 十日 前
 心丸橋 同防 町
 日本橋 南詰 東
 南本町 三橋 北
 本町 心丸橋 東

北 尾 新 雲
 石 川 本 和
 松 口 平 和
 野 中 清 兵
 田 中 安 治
 富 士 文 更
 本 村 村 村 忠 文
 梅 村 村 村 鳥 忠
 梅 村 村 村 昌 兵
 華 村 村 村 支

店 堂 助 七 藏 七 角 備 助 店 堂

明治十三年六月百御届
 同 年 月 日 出 版

發

兌 東

京

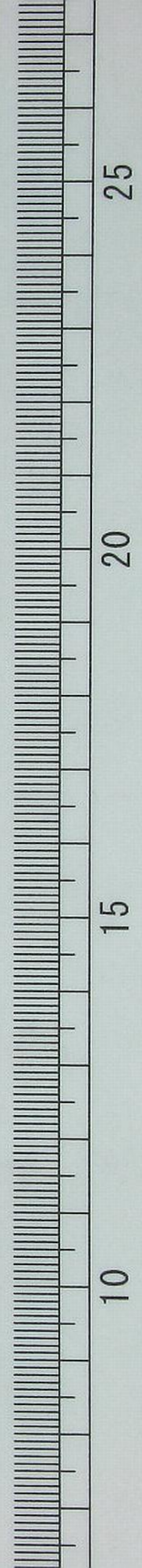
堂

大坂南町
 橋 東 長 久 依 橋 富 三 郎

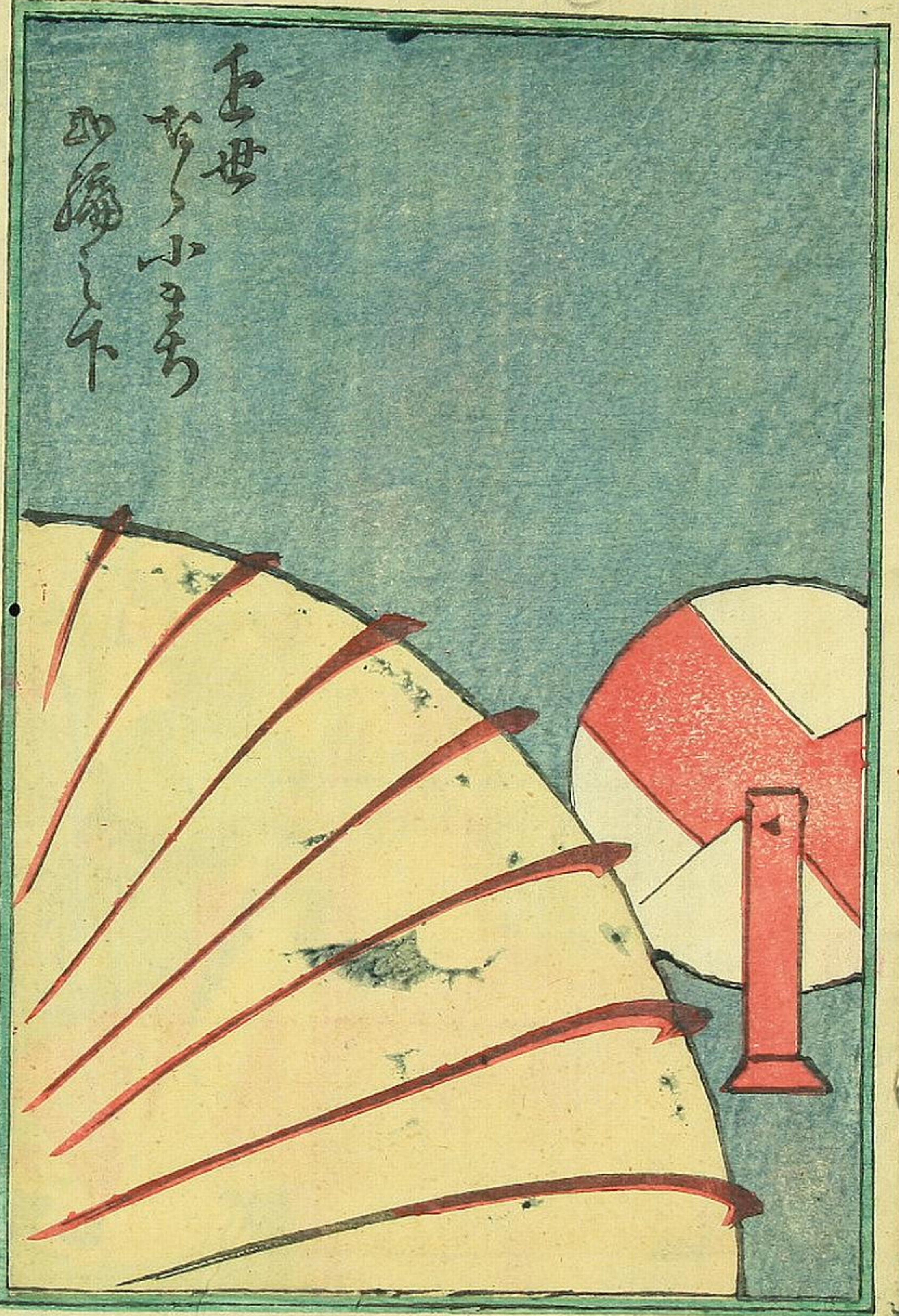
をば改め見れば此間違ひ百圓さへ死のふせし忠藏どの
 頼みのつなの二百圓まで失のふたればよもや生てムろ宇
 よ宇はあしコリヤてつさりその場を去らを爰の深みへ身
 を投さつしヤりたに相違はない俗名忠藏頓生菩提南無阿
 彌陀佛と沖又向ッて回向をとげ涙をそ、ぎその儘に百圓
 金と忠藏が書置添て並木町なる松屋方に行主個も對面あ
 しる上忠藏か身の誤りを述終りその身は小家に立戻り
 忠藏が非命の起りは此安次郎あり今より忠藏が菩提の爲
 廻國せんと心を發し東海禪寺の上人を開師とたのみあら
 氣の黒髪剃落し名も海全と法号し旅僧の姿と出立て廻國
 修行み浪花の方へと心ざと

近世七小町二編中終





4509
65



<48-8285>

近世七小町二編下

○(此編今紫の傳) 備も太田正庵の行衛知れざるありしよ
 り小女喜遊も横濱ある岩龜樓にてふ事の死をとげし後ち
 弟る正太郎の浅草榮久町に住む高橋榮治郎が後家お種
 こそ正庵が妹にて伯母甥の縁有るをもつて正太郎と高橋
 方に養る丁度正太郎と同年ある小女お香が三才のその時
 に父は早くも世を去りて十有余年が後家を立て小女お香
 と養育のその内にわづらの時へ金まであり且ひのため
 遣ひ累一榮久町の自宅まで借財の方へ造作共に明ヶ渡し
 後家のお種はお香正太郎の二人を抱へ住馴れ一區の地名
 も榮久町とよびあせどその身の不幸に立退て麻布古川町
 又知己有るを僥倖又僅かの造作金を借り受て間狭た方に

近世七小町二編下

引越して貧し世を送る内お種にしづかに寄る年ころの
日此煙りも母をくぐりつ月日に關守早くも亡父榮
治郎が七回忌と正庵行衛知れざるより出さる日をば忌日
と取り是も丁度一週回の忌日に當れど佛事を勤めいあぶ
てあられれば母のお種はさ亡夫たる榮治郎が位碑に向ひ
て心にまかせぬことの涙のかぎりうさくどくを未だ
十歳にもならぬ女のお香の母が心を察し父が七回忌の退
福を營む爲よたしをを勤めとやらに出したお金で父が
忌日を吊る穿て下されど小女がせつある詞を聞母のいや
ます悲しさのやるせあられれば何と言葉も泣斗り答へぶよ
もあられれば甥の正太郎の二人が心くまどりてたどへ枝
豆うりをなしてありと伯母さんわたしがきつと養なひ

ますると三人の小兒が利發よりお種に亡父が七回忌と兄
正庵が佛事まで營む事もお香の孝心正太郎が徳氣さも或
ひに泣き或ひに悲しみ苦界に入れるも氏のふて小女が出
世の種ともなふんとお香が亡き父への孝行を無にさすと
の出来がたしと幸ひ隣家に吉原ある金瓶樓へ出入の者あ
りて是に小女のことと云々托し談合も付て後ち証書かいて
百圓金を金瓶樓より借受て小女は勤奉公に遣として夫と
兄が年忌もいと年頃よとむひけるお香の吉原金瓶樓よ
行てより主個の元なる納討扉の小間つらひをヤ、半年も
なして居るうちに識直のお香あれば主個も娘のおどく
愛しけるよ當樓のおいらん二代目今紫が部屋禿口あさよ
幸ひに主個の小用に來たる小女の兒いやしかかぬ育十柄

あれば今紫は禿口むくちはいはいく部屋へに使用つひい新造喜世川しんぞうきせがわをも
つて主個しゅこの居間いまに遣つひいしてお香かうを所望しよぼうの今紫いまむらさきが使用つひいさる
に主個しゅこもおまいよく今紫いまむらさきが頼たのみと有あるを否いなむとも出で来きか
くお香かうもどくといひふくめその儘ま新造喜世川しんぞうきせがわも托たくして今
紫むらさきの禿口むくちとなし名なを静しづかと改あらためて目出度めでたさとしての門かど松まつも七ななツ
八歳やとせを越こす内うちも静しづかの早はやくも十七年じゅうしちねんの春はるをひりへば姉あね娼妓じやうき
の今紫いまむらさきも去さる豪家ごうかの某そのれ根退ねひきとあらん契約けいやくの金圓きんえんまでも
調ていへば静しづかをもりて三代目さんだいめ今紫いまむらさきと名なと譲わづり姉あねの今紫いまむらさきが引祝ひきいねが
と静しづか改あらため三世さんせいの今紫いまむらさきが突つ出だしに兩國にこく横山町御用達やまやちやうごようたつの町人ちやうじん
宮崎某みやざきそのれと芝金杉邊しばのの商人しやうじんもて是これも豪家ごうかの聞きこへある柳屋某やなぎやそのれ
等らより千圓金せんえんきんをなげ打うつて新吉原しんきちげんの大門だいもんを扉鎖ひらさ斗たりの派は
手遊てあそびに五花街ごてうまちでの風説ふうせつの今木文いまきぶんと仇名あなを標ひらし今紫いまむらさきが客きやく

人と知らぬものもなき事の數かずく小女こめお香かうが派は手てある突出つくだ
しよりよき客人きやくじんの付つたるよふすを麻布あさぎ古川町ふるがわちやうに住すまし母はの
お種おたねも聞きてよりその喜よろこびの限かぎりもあく吉事きちじあれを凶事きよふじに
近ちかしとたどへのおどくお種おたねの小女こめが出し世よをば祝いわぶ甲斐かいも
嵐吹終あらしふきは病氣ひやうきの發はつしてより正太郎せいじやうの手てあつく治療じりやうを加くへ
どもその減更げんえいに見みへせして既すでに今紫いまむらさきが十七年じゅうしちねんの春はるを母はが
一期いちごどあしはかなく此世このよを去さりし事こと正太郎せいじやうと今紫いまむらさきの方かたへ
知られば太夫たゆう(今紫いまむらさき云い)が泣なき限かぎりあく死骸しがいを亡父むちちち
が菩提ぼだいなる下谷したや萬松寺まんしやうじに埋葬まいさうおし跡あとに正太郎せいじやうはお種おたねが忌き
日も怠おこりなく墓はか参まりまで年ねんらい營いみて晝ひるの家業かぎやうに糊口こくちを
しのぎ夜よるの手習てなひ學文がくもんに眼まなこをさらし亡あき姉あねの喜遊きゆうと父ちちた
る正庵せいあんお皆川町みながわちやう典藥てんやくのその頃ころは和歌わがの道みちを好このし心受こころうけ

つぎて正太郎の十九年の春をむかへば好める道に達して
より和歌俳句の宗匠の列に入り俳号を太中庵喜遊と改め
古川町に風雅の世を予樂しみくらすその内は正太郎の喜
遊の従妹たる三世今紫が吉原金瓶樓にて全盛の太夫とな
りしを聞度はその祝ひの余りに時おりに色紙短冊には
已が自詠の和歌發句を記し太夫が元どお送りければ太夫
の方よも喜遊を兄の如くに慕ひて文の便りの度毎に亡き
両親が位碑とお守りの禮金を文箱に入れてさし送るよ太
中庵も今紫が誠實ある心を感じし余りにて風雅の友よも
物がたれを新吉原にても今紫が評判高くありしかば金瓶
樓へ今紫を名ざしにて登樓なせしその客の更に晝夜の分
ちあつく新造やり手をはじめとなし若ひものよぬたるまで

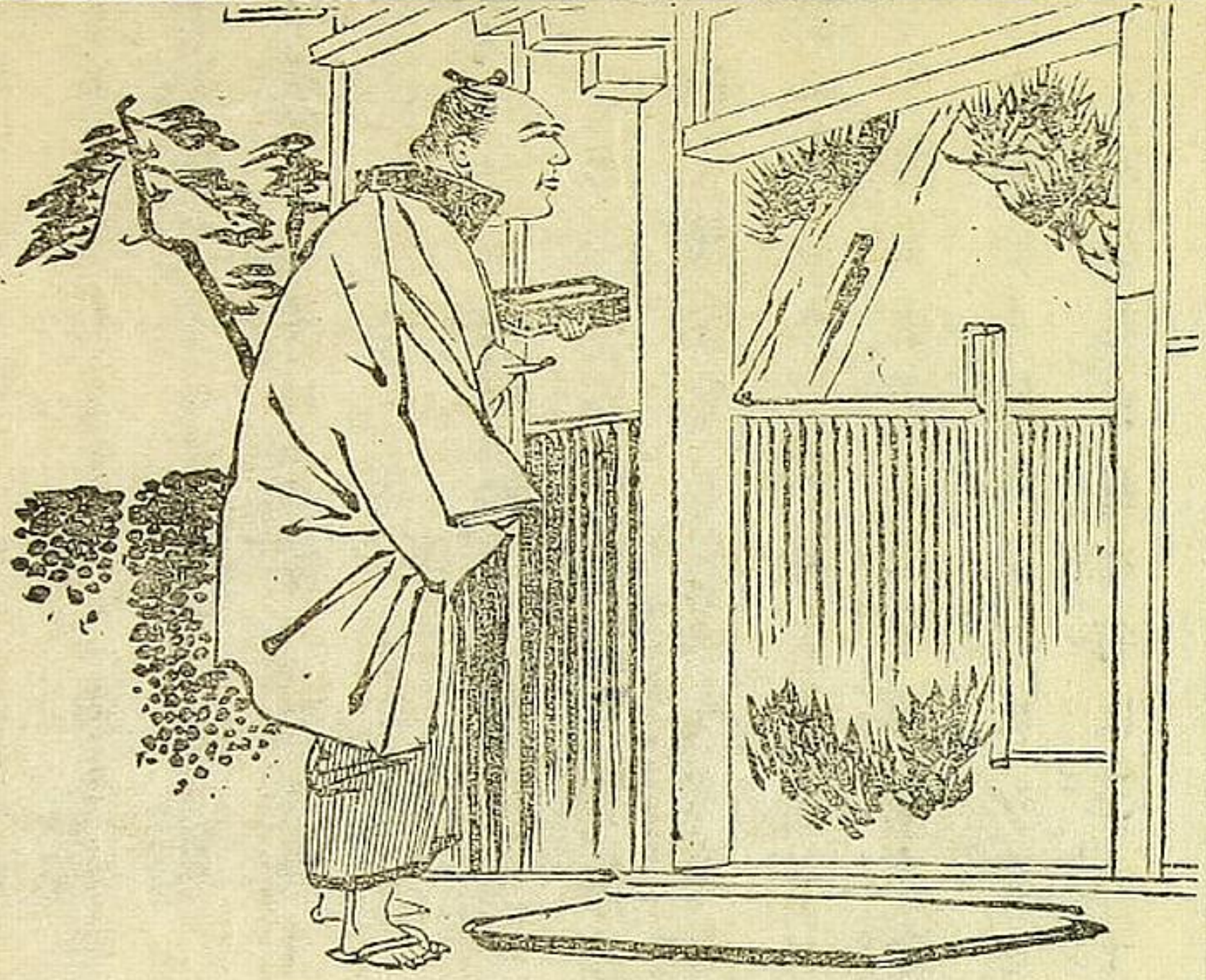
今紫を標して大盛高尾太夫が再來ならんとそも突出し
のその時々僅か二年を隔たぬうちあまたの太夫の其中に
ておまよくの松位を示しける

○記者曰く金瓶樓の全盛今紫の二世三世を説きいぶ
せど本編の畧傳も著るべし則ち高橋某が長女お香
事吉原に行て静改め三代目今紫なり
横濱岩龜樓の娼妓喜遊は亞人を客にとらんとを悲
しめて倭魂を白して自殺せし太田正庵が長女の
喜遊則ち正太郎が姉あり喜遊亡して後ち正太郎の
風雅の流を汲て俳号を太中庵喜遊と標し宗師の列
に入りしは太田正太郎亡喜遊女が舍弟ありや、も
すれは間違ひやすし續集君其注目を希ふ

○金瓶樓三代目今紫が世評高ければ高位高官諸家豪商の
通客は今紫を愛せざる者を耻辱の如くに標をそと爰にあ
る高家の老職たる織寺大和は彼の今紫が見ぬ戀にあこ
れて新吉原仲の町の引手茶屋山口巴屋より送らせて金瓶
方に登樓なし樓の全盛今紫と名ざせども初會の客を斷り
て他の娼妓を進むれど織寺はもとより今紫にあこがれて
名ざして登樓の事あれば更な變せぬ編個の侍やり手若
者はいふもさらり山口巴の若ひ者もあぐみんて是非な
く今紫が都屋に行新造をもめて太夫の元へ此子細を云
入れば太夫の始終さとりて高位の君で有りあがらぬや
しき娼妓をそれほどにまで仰せあるを達手といふ娼妓
仲間の規でなし娼妓にも少との誠を立ねば此身の冥加も

恐るべし初會の堅くことわれども今紫の他娼妓は愛せぬ
とあるお心も得ぶされてそのお座敷へ出まると太夫がう
け能は挨拶も茶やもよろこび小踊りあして引付席に居る
織寺も太夫がうな能き言葉の中へ甘舌を入れての話しを
聞とり織寺のつての外ある喜びよく俄かに物花出した
その上にか、りのもれへまたそれぐに手當とあし今紫が
来る事を今や遅いと待居たる今紫の仕かきも立派に着か
ざりて初會の席も出来りく會しやくとあせば織寺の懐中
より五百余圓の紙幣をとり出し太夫左少あがらも今宵の
身が産だ納めてくれやまどさし出せば今紫の見むきもせ
せ煙竿の先死で手にもふれずに押もどし初會馴染のお金
ならああるを送りし茶屋をもつていとしやんせ土産と名

を付け派手を切られた人聞、包るい此金圓今紫のほしく
 有りません氣ザち仁ぶといふ儘にその座を立て己が部屋
 にぞ歸り行わとはしらせて若ひもの顔見合せて何といひ
 出そものもなくそうじをしやに席をはづして迷退くあり
 さま織寺が立服かたがりあたを傍よりみちくよめてあぶめ
 つ、其夜の空しく織寺も主家の邸に返り行此顯末を聞居
 たるの同しその夜も今紫が元に来て換臥床にある通客の
 横濱の交易商人田中平八通稱を糸平とて我國交通盛んよ
 行ち包れしにしたがひて夷人を相手の大服もの織寺が空
 しく歸りありさまと今紫が意氣地を感じ思わざ太夫の
 部屋に出来れ幸ひ座敷の返りたる跡あれば次ぎ部屋あ
 る火鉢の傍に今紫何か小用を達しているかへよそわり



て織寺おと譽そやしッ、衿
 にうけたる金時計をとり出
 してコレおらんこあたの
 心をかかんしんのあまりあこ
 まりのしまぬが小遣ひも
 とぬひたひおまた突ッ返さ
 れちやア此吉原の大門を這
 いるとが出来あいうら本の
 糸平が心付た幸ひと小形の
 此時計をこあたにくれて行
 から持りや字に成りと屑屋
 に賣成りどそれは心まのせ

外に誰も聞入のない太夫の部やでのさし向ひ納めて置いて
下さぬとさし出したる金時計獨逸よりの舶來品千余圓の
外國品をお氣もなく與へつゝ、その儘立て出行んとせし
袖と今紫の引留てモシ糸平さん氣端氣儘のわたしをば異
簡のかわりあ却つて譽て下さんすかと面目ごさんすゆへ
是りら氣儘も止めますと顔に紅葉をちらしつゝ、詫ぬ斗り
のわいさつに糸平も打笑らひ「イヤ、和々でおまへの異
簡を仕やぞといふやぞあ分別の有る糸平じやねへそりや
おんぐんの氣のまじりサテ氣の廻りあわ知らねども初會
の客が土産と名を付け大金を下されしは高位のお方るあ
りながら娼妓風情にお金を出して下さんすはよく冥加
ま叶ひし此身夜毎に五人十人と枕のかわる憂き勤めモシ

客人よ不勤といふるはあけれど客人と名の付く上は少
しのとより俠客張り引手茶屋から主個又までめいわく掛
ることの出來よふかと思ひ過して優しくも斷りぬへぬ
傾城といふ名の付たのが此身の因果それを意氣地のある
よふますげなく云て客人を返しこの心は深ぬ出過た詞
モシ糸平さんお客を撰び今紫ではござんせぬはしたな
娼妓じやと愛想も尽すか今宵限りあなさらせとせふぞ今
までのね心にかかりあくるゆやでもござんせやうが足を近
寄通つて下さんせと誠をありして詫ぬれば糸平も立か、
りたるころを下お落付て二度とあしを向々まぬと思す
ものが八里へぶてた横濱かゝ何で毎日通うものかまたそ
げあくされると増く足を近く通ふが男のくせ今そなたを

譽たの實に心をかんとしたといふその譯は夜毎枕のり
わる娼妓でもまた區の小女にせよみやだといつたその男
にどうして一寐の出来るものじやねへそあたもよく話し
よも聞てみやうが丁度今年で十有余年もあとの事ぶ岩
龜樓も喜遊といふ全盛が有りてその全盛に亞墨利加人が
大そう思ひ付た所が何をいつても十年あとはまだ衆人が
開ケぬので外國人を夷敵とか何とかいふ時分もへよその
亞人を喜遊が客よ付ケやうと岩龜樓の主個もゆるくに云
込でも中く得心を仕あかつた所から主個と亞人の番頭で
日本人の外山鞆之助といふ男と言ひ合せてその鞆之助か
東京の喜遊親を迎ひに居つたと思わつせと一くかたる
糸平が話しも自身に覺へ有る伯父正庵が行衛の知れぬを

幸ひと手藝のばいにもあらんかと素知らぬ体にもてなし
てわざと話のあどを問ひうければ糸平も時間の移るも
打忘たその喜遊が親といふ何でも元トの老いぶん扶持
も相應に取つた士どかで小女の所へ逢ひに来るその途中
夷人が迎ひの駕籠の中に自殺をしふその跡で喜遊もまた
亞人の座敷へ出る事がみやさに倭魂といふ編個を出して
是も自害をして死ぶ事も有るがその基といへば亞墨利加
人が喜遊を思ひ込だ所から親子共み非命の死をとげた事
も聞てみるうら決してそなたの氣端氣儘といふ思わぬと今
紫が由縁とも知らぬ他人の湘流の話しを聞に今紫のよる
こびてそうしてその喜遊さんといふ全盛の親御といふの
東京へ來やしやんとどちらで自害をなされたのもいせん

の志しを失わぬ義を貫きての御生害でござんせう本よ余
所事と思ひませぬそらして迎ひおさめりた夷人さんの
番頭さんのお名まへ何とゆういひましたねへと念をいれ
て聞とれば糸平もとより今紫が正庵の由縁りと知らねば
さゝお不へどけはあしこま(サア)の男が外山鬻之助とい
つてすひ分と人のよくあひやつて有ツさそふどがどうせ
夷人館へ雇われるやツぶから眞ものじや有る。そぞらうこ
ちらも夷人合手の商人だ余りわるくもいわれねへまゐし
太夫の部屋で長ばなしをるを出さねへうちにおいとま
仕ましやうと話しのおくぎりゆくと胸に思案の今紫を送
り出さる廊下口糸平太夫に手をとられ下る階子もつかれ
り、迎ひの駕籠も打乗りて受を飛して糸平の横濱にこそ

歸り行○今紫の客人と送り出して己が部屋立戻り十有余
年がりの間行衛の知れざる伯父太田正庵の行衛をこよひ
思ひせも始めて聞知り或るひは泣き或るひは悦び座敷の
明れたるを幸ひも硯紙を取り出し正庵が自殺あらまし聞
とる儘のとしり書その儘文箱に封じめの名宛は麻布古川
町なる歌道の宗匠太中庵喜遊先生が元に飛脚をもつて知
らそれば太中庵の今紫が元よりの書状をどくく讀み下し
是も同じく思ひぬ父が行衛をば始めて知つたるそが中よ
非命の文に悲しみつ、も夢をいふ、ちそいふ心も宇宙の
思ひ太夫が返書を認めて使ひの者も托しやり自身直に
支度を調へ横濱にはせ行て亞墨利加人の商館にぶね行
外山鬻之助が事とらぶれども十有余年の昔の事こと

賣 捌 所

大阪堂	心也橋	庭屋橋	平野町	天満天神鳥居	南久富寺	心也橋三寺節	南久富寺	心也橋	日本橋南	日本橋	日本橋	日本橋	日本橋	日本橋
角	角	角	前	前	前	前	前	前	東	東	東	東	東	東
北	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新
雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲
聞	聞	聞	聞	聞	聞	聞	聞	聞	聞	聞	聞	聞	聞	聞
助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助
店	店	店	店	店	店	店	店	店	店	店	店	店	店	店

堂 助 七 藏 七 助 七 助 七 助 七 助 七 助 七 助 七 助 七

明治十三年六月百御届
 発 兌 東 京 堂
 編 纂 者 伏 富 三 郎

近世七小町二編下ノ巻終

余り佛事供養をとひらぬける
 ○外山鶴之助が積悪露顯に及び高橋お傳中西梅子江
 其の嘉代ノ三編より委しく脱出し善悪の終りまで
 讀み給ひんことを乞ふ
 に亞人伊留宇須ハ其後本國ニ返リ外山ハ商館ニテ悪事を
 なし脱去して後ちノ行衛ハ更ニ知悉ざるのその聞傳へ云
 を當途の尋もの喜遊ハ詮方なくくも東京ニ返れば親子の
 きづなは切がたく抑も外山ニ少しの手付けるよりふらぎよ
 も出合て亡父をそじめ姉が非命も聞知りて喜遊ハ難きの
 余り佛事供養をとひらぬける

